

## 『佐々木弘綱の世界』を読む 服部崇

本年七月に東京に引つ越すに当たり本棚の整理をしているときに北川英昭著『佐々木弘綱の世界―幕末から維新期の歌人・歌学派国学者―』（平成二十五年、佐佐木信綱顕彰会）を再び手に取った。本書は北川氏が佐佐木信綱の父、佐々木弘綱のことを様々な資料を探し求めて書き溜めた長年の研究の成果である。弘綱は徳綱の三男として一九二八（文政十一）年に伊勢国鈴鹿郡石薬師村（現鈴鹿市石薬師町）に生まれた。今回、本書を読み返し、興味をひかれたのは、北川氏が弘綱の紀行文『加越日記』を読み込み、弘綱の人柄を整理している部分である。『加越日記』にみられる弘綱の特徴として北川氏は六点を挙げる（一八二頁～一八六頁参照）。

第一は、弘綱には新しいものを取り入れる積極性（柔軟性・革新性）があったということ。この点は信綱を連れて東京に引つ越したことにも現れていたと思う。

第二は、平和な時代には学問研究は大切と考えていたということ。ここでは、「今よりは学の道に名をあげよ弓矢とるわざすたれたる世ぞ」という歌の引用があった。

第三は、信仰心は許容性のあるもの常識性のあるものであったということ。北川氏は自然崇拜的・土俗的と書いている。

第四は、人との交際の中から生活心情が見えるということ。山村である蔵生村にて宿泊した際に饗応を受けた際に弘綱は「芹

蔵芋などならんとおもひしに。いつのまにとりよせけん。海の魚がちなるは。山中に似つかしからず。中々に心おどりせられてなん。」と記している。

第五は、故郷は石薬師であるとの自覚。北川氏は、弘綱が石薬師を発つ際に「故郷をたつ」と記していることを取り上げ、「弘綱が石薬師を終生故郷と思っていた熱い思いが、そう書かせたのだ」と思っている。これは石薬師生まれの筆者の独りよがりだろうか。」と書いている。これは北川氏の独りよがりではないと思う。

第六に、人名・地名を丹念に記録していること。北川氏は毎日弘綱はたんねんにメモを取っていたのではないかと想像しているが、私たちも弘綱を見習うべきか。

巻末に掲載されている弘綱五十首のなかから五首引く。

- ・ 檜原のひじりの御代の古へのあとをとめても来たる春かな
- ・ 百鳥のさへづる春も鶯のこゑに似たるはきこえざりけり
- ・ 荒小田の大樋がもとに咲きにけり葦の花のささやかにして
- ・ あげまきに苜りとりたれつる又ばえの薄みじかき牧ぞひの道
- ・ 飛ぶ車天より人をみてこずや空をあふぎてただに歎くも

一首目、明治維新を寿ぐ歌。「戊辰元旦大政復古をよろこびて」との詞書きがある。二首目、さまざまな鳥の音が聞こえるがウグイスの鳴き声は聞こえない。「に似たるは」が面白い。三首目、荒れた田んぼの大樋というスミレの花が咲いている場所の特定がいい。四首目、刈り取られたあとからまた生えてきているいまだ短いすきを眺めながら秋の牧場沿いを歩く。五首目、空飛ぶ自動車だろうか、斬新な発想。実景として「飛ぶ車」を詠めるときはもうすぐ来るだろうか。